

### 第3回ライブニッツ研究会発表要旨

## ライブニッツ哲学の個体と世界

橋本 由美子(中央大学)

ライブニッツは「すべての真理は分析的である」と考える。これは真の述語は主語に包摂される、とも、真の命題の述語は世界に起きた出来事の要素となる、とも言い換えられる。事実命題を分析的だとみなすということは、何を意味するのだろうか。

「シーザーはルビコン河を渡った」という命題が真であるのならば、「ルビコン河を渡った」という述語は「シーザー」の概念に含まれる。こうして「ルビコン河を渡る」は、シーザーの概念に内属する。シーザーに属する述語はこれだけではない。ライブニッツの体系では、線引きができないために、ひとつの述語を主語に属させたならば、ただちにあらゆる述語が主語へと内属することになってしまう。「ルビコン河」と同等の権利であらゆる出来事が述語としてシーザーに属することになるのである。こうしてひとつの述語が主語に内属するならば、世界に生じる一切のことは—それなりの視点から—シーザーに内属せざるをえなくなる。そして、内属は表出へと転化する。

すると、世界は主体の外部にではなく、内部にあるのだろうか？世界が外部にあるとしたら、それは実体とどのような関係にありうるのだろうか。世界が実体の内部にあるのだとしても、実体は一つではなく複数ある以上、やはりなんらかの場が帰結することになるだろう。こうした「場」はどのように考えられうるのだろうか。

ところでライブニッツは、個体を点になぞらえている。彼の呈示する点のうちの「視点」が実体の質料性を構成するのだとしたら、それはひとつの「場」をひらく契機をもつだろう。彼は可能的なものもまた「もの」すなわち「個体」だと考える。したがって、そうした「場」には、可能的なものも項として関わることになる。もし現実的なものだけが関わるのならば、そうした「場」は、まず具体的なものがあつた上での抽象になり、観念的なものになってしまうだろうから。また現実的なものは、「充足理由律」にも支配されるのだが、可能性にとどまる無数の共可能的世界は、「矛盾律」にのみ支配される。とすれば、可能的なものも含まれる個体の「場」とは矛盾律に支配されることになる。

しかし、充足理由律と矛盾律の間の相違はどのようなものだろうか。充足理由律を無矛盾性のひとつのありようとするとも出来るだろう。この二つの原理の相違が可能的世界と現実世界の間の隔たりを示す、という仮定を出発点として、個体と世界との関わり、さらにどのような関わりであれ、それが生じうる「場」を考察したいと思う。